

「食べ物を粗末に扱ってはいけません」。
「好き嫌いをしないようにしましょう」。

誰もが小さい頃から言われ続けている言葉です。私自身も言われて育ちましたし、学校の授業や本などで食べ物について学ぶ機会がたくさんありました。だから、「食べ物に感謝をして、大切にしなければならぬ」などと言うことは、分かっていたつもりでした。しかし、あるとき思い知らされました。本当のことは、自分自身で体験しないと理解できないのだと。そして、食の一つひとつは、尊い命なのだ。

そう気づいたきっかけには、ある一頭の熊の存在がありました。

私は毎年秋になると、家族で祖母の家に行って、お米の収穫を手伝います。刈った稲を束ね、干して脱穀をするのですが、思っている以上に大変で相当な体力を使います。同じ作業を繰り返して一日中動き続けなければならぬため、私はあまり好きになれませんでした。「ただ食べるだけのために、何でこんなに苦労しなければならないのだろう」、そう思ったこともありました。それは昨年と同じで、なんとかその作業を終えました。そして翌日。私が食について考え直すきっかけとなった出来事が起こったのです。

「近くに熊が出たぞ」という情報が耳に入ってきました。発見された直後に駆除されたようで、幸い被害はありませんでした。しかし、それを聞いた弟たちは、本物の熊を見ようとかけ足で外へ出て行ってしまいました。私も誘われましたが、熊が倒れているところを見たいとは思わなかったため、断りました。それでも弟たちが戻ってきては誘ってくるため、私は仕方なく熊を見に行くことにしました。弟たちの背中を追ってついでいくと、目の前には思わず固まってしまうような光景が広がっていました。

倒された熊は皮と肉に分けられて、その肉を地域の人で分け合っていたのです。何度も見に来て見慣れている弟たちは、私の隣で

「かわいそうだよね。」

「そのまま埋めてあげればよかったのに。」

とつぶやいていました。しかし、私はこのとき熊のことを「かわいそう」だとは思いませんでした。そんなたった一言で終わらせてはいけなそう思ったからです。鋭い牙や爪、毛皮はまだ綺麗で、今にも動き出しそうな迫力がありました。熊がついさっきまで生きていた証です。

その熊の肉は、私の祖母の家にも「熊の甘露煮」として届けられました。まだ獣臭さが少し残っていて、でも、いつも以上に美味しく感じました。この時初めて、食は命なのだと強く実感しました。一食一食には、見えていないだけで、私が体験したような光景がたくさんあるのだと、初めて本当に分かった気がしました。

ある本で、こんな言葉を目にすることがあります。「この世界にはたくさんの生き物がいる。動物も、植物も、全てが命を持っている。そんな中で、私たち人間は頂点に立っている。頂点にいるものは、下にいるものの命を無駄にすることもできれば、守ることもできる。」

現在、環境に配慮したものが作られたり、SDGsなどの活動が広がってきていたりします。しかし、先ほどの言葉のように、頂点に立っている私たちは自分の意思で命を無駄することもできてしまいます。食べ物を残したり、廃棄したり、その積み重ねが後に私たちに苦しめてしまいます。そうならないよう、行動できるのは今しかありません。

私はあの熊との出会いを通して、食の命の大切さを学ぶことができました。それから私は、食べ物を残さないようにしたり、「いただきます」「ごちそうさまでした」を必ず言うたりして、あの経験を思い出すようにしています。私一人にできることはとても小さいけれど、家族、友達、地域の人と広がっていけばきっと大きな力になっていきます。私たちの未来を、世界中の生き物の未来を、自分たちの手で守っていきましょう。みなさんにも一度言います。食は命です。私たちと同じ世界にいて、同じ価値があります。それをいただいている私たちは、幸せだと思いませんか。さあ、今日も姿勢を正して、いただきます。